

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

立春

平成28年2月第1週放送

からだ
身体に感じる寒さは、毎年これからが本番という気持ちにもなりますが、二月の
せつぶん
節分を過ぎ、こよみ
暦の上では春を迎えました。

暦の方が、私たちの感覚を先回りしているようですが、そのおかげで、少し先の
季節が訪れる^{きざ}兆しを見つけることができるのかもしれませんが。その兆しを、梅、桃、
桜と、次々と私たちを楽しませる花にみる方も多いでしょう。

春に花を^{うた}詠う和歌が多くある中で、^{どうげん}道元禅師は、春の季節にこのように^{うた}詠って
います。

「いつもただ わが^{ふるさと}古里の花なれば 色もかはらず ^す過ぎし春かな」

道元禅師は、咲き誇る花の移ろいを眺めながら、姿を変えない古里の花を^{うた}詠われ
ています。

私たちが古里の花を思い浮かべる時、その思い出に残る花は、実際に私たちが目
にしてきた花々です。生きている花であれば、その花もまた、しかるべきその時に
姿を変える、移り行く花であったといえるでしょう。

一方、道元禅師は、色もかわらぬ花について詠われています。色が変わらない花
とは一体どんな花であったのでしょうか？

時代を^{さかのほ}遡って、お釈迦さまは、インドの^{りょうじゆせん}靈鷲山における説法で、三千年に一
度その花を咲かせるともいわれる^{うどんげ}優曇華の花を手にお取りになり示されました。

その時、弟子の中で唯一、^{まかかしょう}摩訶迦葉は、表情を変え^{ほほえ}微笑まれたのです。

その微笑みの様子を見て、お釈迦さまは、

^わ「我が^{しょうぼうげんぞう}正法^ね眼蔵^{はんみょうしん}涅槃妙心は、摩訶迦葉に付属する……」と示されたと伝え
られています。

優曇華の花のやり取りから、お釈迦さまは、自身の教えの言葉であらわすことの
できない最も大切なものが、摩訶迦葉に引き継がれたことを明らかにされたのです。

こうして「花」は、仏の教えを伝える^{しょうちよう}象徴として、師から弟子へと相^し続^{でし}され^{そうぞく}
ていったのです。

道元禅師の詠われた花は、仏の教えとして変わらぬ姿を持ち続ける、お釈迦さま
から摩訶迦葉へと、そして道元禅師へと受け継がれた、^{いにしえ}古より伝わる古里の花で

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

あったといえるでしょう。そしてその「花」は、優曇華の花にたとえられたお釈迦さまの教えそのものだったのではないのでしょうか？

“春は花”とも言います。私たちの目を楽しませてくれる花も実に楽しみなものです。その一方で、新たな春のはじまりに、色の変わらぬ^{いにしえ}古の「花」にたとえられたお釈迦さまの教えに思いを寄せてみることも、また、春らしいことなのではないのでしょうか。

— 終 —